

## 【論 文】

# 投書の意見文に見られる文章構造の分析 —YNU書き言葉コーパスを例に—

楊 明 翰<sup>1)\*</sup>

1) 東北大学大学院国際文化研究科

本稿は意見文に用いられる段落分けと論理展開について、中国語を母語とする日本語学習者（CN）と母語話者（JP）を対象に、その違いを分析することを目的としている。調査の結果から以下のようなことが明らかになった。① 段落分けについては、CNはJPよりも段落意識が高いが、いずれも段落指導への工夫が必要である。② 論理展開についてCNは「問題提起—意見—実証—意見」のパターンが半数を占めているのに対して、JPは「問題提起—実証—意見」のパターンが4割未満であった。いずれも適切な構成で作成した例が少なかった。③文章構造についてCNとJPはいずれも尾型が多かった。特にJPは頭尾型の使用が顕著であった。CNは結論に至るまで多様な思考過程を経ており、異なる論理展開のパターンが見られたが、JPはそういった特徴が見られなかった。

## 1. はじめに

日本語教育では、作文教育は学習者の日常生活や身の回りに関することを題材に書かせることが多いが、中級以降、論理を組み立てる意見文などが課題として取り上げられる。森岡（1995: 60）は意見文を「あることがらに対する自己の意見を筋道を立てて述べる文章である」と記述している。日本語学習者を対象とした意見文の研究は、文の構造、表現の適切さ、文法の正確さなど、いわゆる言語形式に重点を置くものが多い（浅井 2002; 田代 2007）。一方で、構造の面から論じた研究（二通 2001; Lee 2006; 伊集院・高橋 2012）はあるが、結果は一致していない。

石黒編（2014: 18）は、上級学習者は「構成を意識して段落（パラグラフ）を書けるようになる」ことが指導の目標であると述べている。また、文章におけるマクロ構成の明確さ及びパラグラフ間のつながりがGood Writingの評価基準となっている（田中・阿部 2014）。さらに、構成は文章の評価において文法の正確さよりもその良し悪しを決定づけるとの報告もある（長谷川・堤 2008）。

そこで、本稿は「日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス」（以下、YNUコーパス）を資料として、投書に用いられる段落分けと文章構造について、日本

語学習者と母語話者を対象に、その違いを分析することを目的としている。意見文は事実を挙げ、論点を踏まえながら、書き手の意見を主張するといった特徴を持ち、アカデミック・ライティング能力の育成につながる考えた。

## 2. 先行研究

### 2.1 学習者の意見文についての研究

日本語学習者の意見文を分析し、主要な問題点とした研究に梶本（1997）と二通（2001）がある。

梶本（1997）は中・上級学習者の文章の問題点として、構造、論旨の一貫性、談話標識の適切性の3点があると述べ、指導する際に談話の型とモデル文の提示が必要であると説いた。梶本は新聞の投稿欄の意見文を取り上げ、構造分析を行ったが、日本語学習者と母語話者との比較は行われていない。

二通（2001）は作文対訳DBコーパスを利用し、日本人学生と中国人および韓国人日本語学習者の意見文を分析した結果、意見の未提示、理由の欠如、内容の未整理、急な話題転換、エッセイ的な文章といった問題点が学習者の文章に見られたことを指摘している。

次に論理展開についてはLee（2006）と伊集院・高橋（2012）がある。Lee（2006）では学部留学生と日

\*) 連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学大学院国際文化研究科 maru7766@dc.tohoku.ac.jp

本人学生の意見文を比較し、構成に関しては両者ともはじめの方に課題について賛否の意見を述べ、それから意見をサポートする根拠を挙げ、最後にまとめをするという双括型が多いという結果が得られた。それに対して、伊集院・高橋（2012）では日本人学生は「はじめ」と「おわり」に主張を置く頭尾型が多いが、学習者には特定のパターンが見られないという結果が得られた。伊集院・高橋（2012）は母語話者において Lee（2006）と同様の結果であったが、学習者において異なる結果を得た。

一方、段落の分け方から検討した研究に二通（2001）と李（2011）がある。二通（2001）では母語話者は段落分けをせず、また2段落で作成した者が多かったのに対して、学習者は段落を細切れにする者が見られたと指摘されている。李（2011）は母語話者のデータとの比較は行っていないが、一部の学習者には段落意識が欠如していると述べており、この点はおおむね二通（2001）と一致している。

以上見てきたように、意見文は一定の構造を持っているので、学習者は文章を作成する時に構成を意識しなければ、問題が生じるということが分かった。文章構造の解明に段落分けと論理展開が重要な手がかりであり、その現れ方が全体構造に反映していると考えられる。次節では文章構造を見る上で重要とされる段落と論理展開について述べる。

## 2.2 段落、論理展開、文章構造についての研究

国語学大辞典（1980: 592）では段落を「文章における内部区分の一。小主題を中心とした一まとまりの表現とその区切り。基本的には話題文のみでも段落を成すが、通常は二文以上の文集合から成る」と定義している。段落には2種類ある。形式上一文字下げ、改行によるものを「形式段落」、表現内容から複数の形式段落より一つまとまりのあるものを「意味段落」と呼ぶ<sup>1)</sup>（市川 1978）。

段落と似ているものに「パラグラフ」があるが、両者に違いがあるという説もある。日本語の文章にパラグラフの概念を導入すべきであるとし、各段落の頭に中心文が書いてあることが望ましいとされている（木下 1981）。アカデミック・ライティングで一つの段落

に一つの主題を述べ、段落の間に繋がりを保つことが重要である（Grabe & Kaplan 1996）。本稿ではこの立場に立って考察する。

次に、論理展開のパターンについて述べる。長尾（1992: 30）は、意見文・論説文の論理展開の型について以下のように6つのパターンを提示している。

- (a) 問題提起－資料（実証）－結論
- (b) 主張－実証（資料）－結論確認
- (c) 具体事例－問題点指摘－資料補足－結論
- (d) 定義的解説－具体事例－発展的考察－主張
- (e) 問題提起－資料－仮説－資料補足（実証）－結論（仮説の修正）
- (f) 具体事例－問題点指摘－予測（仮説）－資料補足－結論

その中で（c）はルポルタージュや新聞の論説によく出現する形式であり、書きやすく、効果的であると述べられている。よって、意見文の流れは（c）のパターンが適切であると考ええる。

最後に、文章構造に関しては、佐久間（1990, 1999）は「統括機能<sup>2)</sup>」の概念を用いて、文章の構造類型について、頭括型、尾括型、両括型、中括型、分括型、潜括型という6つの分類を示している。一方、伊集院・高橋（2012）は形式段落に基づき、主張の文が文章の「はじめ」「なか」「おわり」の出現位置によって文章構造の型进行分类している。

以上、段落、論理展開、文章構造についての研究を見た。本稿では長尾（1992）と伊集院・高橋（2012）の方法を援用し、意見文における論理展開の配列順序と文章構造の型を見る。意見文の論理展開と書き手の意見が現れた位置の分析によって、文章構造の型をよりよく把握できると考えたからである。

## 3. 研究課題

本稿では意見文を分析するに当たり、段落と論理展開パターンに着目し、合わせて文章構造の型を見る。このため、研究課題を次のように設定した。

課題1. 日本語学習者と母語話者は段落数の使用に違いがあるか。

課題2. 日本語学習者と母語話者は展開パターンに違いがあるか. その違いは段落数の使用とどのような関連があるか.

課題3. 日本語学習者と母語話者は文章構造の型に違いがあるか. その違いは段落数・展開パターンとどのような関連があるか.

## 4. 研究方法

### 4.1 意見文のデータ

本稿ではYNUコーパスを調査資料<sup>3)</sup>とし, その内のタスク6「市民病院の閉鎖について投書する」という資料を用いた. このタスクは読み手が特定されておらず, ある程度の長さが保たれていること, そして, 書き手の意見や反論としての主張の文が必要であることから, 適切であると判断した. なお, タスクの完成には母語訳の指示文があり, 書く時間の制限を設けず, 辞書の使用は不可という条件で実施された.

タスク6の説明は次のようになる.

経営難のため, あなたの町では, 市民総合病院の閉鎖が検討されています. この病院には近隣の町にはない産婦人科, リハビリテーション科があり地域住民への影響が心配されます. 現行の診療体制での存続を求め, あなたの意見を新聞に投書してください.

(金澤編 2014: 28)

### 4.2 対象者

YNUコーパスには中国語母語話者, 韓国語母語話者, また日本語母語話者各30名のデータが集められている. YNUコーパスの詳細は金澤編(2014)を参照されたい. 本稿では中国語母語話者(CN)と日本語母語話者(JP)のデータのみを扱う.

CNとJPの情報は表1に示す. CNは男性が10名, 女性が20名である. 日本語のレベルは上級程度と考えられる. SPOTの得点は男性が60.4点, 女性が61.85点, 全体の平均は61.37点である. 一方, JPは男性が8名, 女性が22名である. CNとJPはほぼ同世代である. また, CNは母国で, JPは学習段階で論理的な文章を書くトレーニングを受けたことがあるかどうかは不問とした.

表1 対象者についての情報

| CN         |       |                           |                           | JP         |       |
|------------|-------|---------------------------|---------------------------|------------|-------|
| 性別<br>(人数) | 年齢    | 日本語の<br>レベル <sup>4)</sup> | SPOT <sup>5)</sup><br>の平均 | 性別<br>(人数) | 年齢    |
| 男性<br>(10) | 21~29 | 1級8名                      | 60.4                      | 男性<br>(8)  | 19~24 |
|            |       | 2級1名                      |                           |            |       |
|            |       | なし1名                      |                           |            |       |
| 女性<br>(20) | 18~28 | 1級18名                     | 61.85                     | 女性<br>(22) | 19~25 |
|            |       | 2級2名                      |                           |            |       |

出典: 金澤編(2014)の数値を基に筆者作成

### 4.3 分析方法

段落の使用数については, それぞれの区切りは学習者の自由意志によって遂行されたものと考え, 文章に一文下げ, 改行が行われたものを1段落として数え, いわゆる「形式段落」を単位とした. 1段落構成の場合は「意味段落」を単位とした.

展開パターンについては, 長尾(1992)を参考にし, 意見文の中の「問題提起」「意見」「実証」の部分に着目し, 文章の配列状況を調べた. この配列状況を見たのは論理展開の思考と関わっていると考えたためである. また, 作文課題の実施条件から見れば, 今回のデータに「資料補足」の部分がないため, それを分析から外した.

本稿の「問題提起」はテーマに関する説明及びそれに関連する問題点の説明を指し, 「意見」は問題点についての自分の考え方や主張の文を指している. 「実証」は意見の理由の一部でもあるが, 具体的な事例を用いて説明する部分も実証として見なした. また, 1段落に2つ以上の要素が同時に現れた場合, 出現順に合わせて記録した.

文章構造の型については, 伊集院・高橋(2012)の分類に従った. 今回のタスクでは病院閉鎖に対して「存続を求める」文や「反対意見」を示す文が主張の文に相当すると考えられる. 主張の文の認定<sup>6)</sup>はこの基準に基づき, 日本語母語話者(日本語教育専攻の大学院生)1人を加え判定した. 判定は筆者と日本語母語話者が独立に行った後, 両者に食い違いがある場合, 前後の文脈を検討し, 協議を通して行った.

5. 結果

5.1 作文の長さや段落数について

まず、作文の長さについて見る。英語では文章の長さは語数で測るのが普通であるが、日本語では1語の認定は古くから議論されつつあるので、本稿においては字数を数えることにした<sup>7)</sup>。表2のように、作文の文字数では、CNは404.3字であるのに対して、JPは393字である。両者の正規性を確認したうえでt検定を行った結果、有意差は見られなかった ( $t(58) = .291, p = .772, ns.$ )。

表2 作文の長さ

|              | 平均値   | 標準偏差値 |
|--------------|-------|-------|
| CN<br>(n=30) | 404.3 | 159.8 |
| JP<br>(n=30) | 393.0 | 142.7 |

$t(58) = .291, p = .772$

表3は作文においてCNとJPによる段落の使用数を表しているものである。CNは3段落と4段落の使用が最も多いのに対し、JPは1段落の使用が最も多かった。両者の間に差があるか否かを見るために、クロス集計表（フィッシャーの直接確率検定）を用いて比較したところ、有意な差が見られた ( $p < .05$ )。さらに、残差分析を行ったところ、2段落の使用では、JPのほうが有意に多いことが示された。4段落の使用では、CNのほうが有意に多いことが示された。

そこで、改行するのに適当な文字数を考える。一般的に1つの段落に200字程度で行替えが行われることが多いとされる（新版日本語教育事典 2005）。200～300字（木下 1981）、250～300字（二通 2001）との説

表3 段落の使用数

| 段落数 | CN  |      |           | JP  |      |           |
|-----|-----|------|-----------|-----|------|-----------|
|     | n   | %    | 調整済<br>残差 | n   | %    | 調整済<br>残差 |
| 1   | 7   | 23.4 | -1.1      | 11  | 36.6 | 1.1       |
| 2   | ▽ 1 | 3.3  | -2.3      | ▲ 7 | 23.3 | 2.3       |
| 3   | 9   | 30.0 | 1.2       | 5   | 16.7 | -1.2      |
| 4   | ▲ 9 | 30.0 | 2.3       | ▽ 2 | 6.7  | -2.3      |
| 5以上 | 4   | 13.3 | -0.4      | 5   | 16.7 | 0.4       |

▲は有意に多い、▽は有意に少ないことを示す。

もある。本稿は2.2で述べたように意見文の構造を考えた上で、仮に3段落法（序論、本論、結論から成る）を用いて1段落に200字程度で作成する場合、全体の長さは600～700字程度に相当すると考えられる。表2と比較した結果、今回のタスクではCNとJPは共に字数が少ない傾向にあると考えられる。

さらに、段落毎の字数を詳しく見ると、2段落構成ではJPは1段落字数の使用につきばらつきが見られるが、3段落構成と4段落構成では200字未満の項目にのみ入っている。それに対して、CNは3段落構成と4段落構成では200字未満の項目だけでなく、200字から400字の項目にも入っている。

表4 各段落構成における字数の使用

| 段落毎の<br>字数   | CN      |         |         |         |               | JP      |         |         |         |               |
|--------------|---------|---------|---------|---------|---------------|---------|---------|---------|---------|---------------|
|              | 1<br>段落 | 2<br>段落 | 3<br>段落 | 4<br>段落 | 5<br>段落<br>以上 | 1<br>段落 | 2<br>段落 | 3<br>段落 | 4<br>段落 | 5<br>段落<br>以上 |
| 200未満        |         | 1       | 22      | 31      | 20            | 2       | 9       | 15      | 8       | 22            |
| 200 -<br>400 | 6       | 1       | 5       | 5       |               | 7       | 3       |         |         | 4             |
| 401以上        | 1       |         |         |         | 1             | 2       | 2       |         |         |               |

5.2 論理展開と文章構造の型について

本節では意見文においてCNとJPの論理展開について検討する。具体的な分析方法は4.3節に述べたように、配列要素の使用状況を調べ、論理展開のパターンを考察する。その1例を表5に示す。なお、文章は原文のままである。

C001の例ではまず①で問題提起をし、②と③で病院閉鎖により生じる問題について自分の意見を述べ、④と⑤で意見についての理由や具体事例を示している。⑥は意見でもあるが主張を示す文でもある。主張の文は波線で表している。

上述の調査資料60編を調べた結果、6つのパターンに分類できた。その内訳は表6の通りである。

CNは「問題提起—意見—実証—意見」が最も多く（15名）、その次に「問題提起—意見」、 「問題提起—実証—意見」の順であった。JPは「問題提起—実証—意見」が最も多く（11名）、その次に「問題提起—意見—実証—意見」であった。この結果から、今回の作

文でCNとJPはそれぞれ異なった書き方をしているということが分かる。

という主張を示すという書き方をしている人が多かった。

表5 作文における論理展開の分析例

| 段落 | 文NO | 学習者C001   | 要素     |
|----|-----|---|--------|
| 1  | ①   | 市民総合病院は、経営難で近いうち閉鎖することをよく耳にするようになりました。  | 問題提起   |
|    | ②   | それを知り、最初は驚いたのですが、徐々にそれが「困ったなあ」という思いになったのです。                                   | 意見     |
|    | ③   | なぜなら、市民病院には、保土ヶ谷区にあるほかの病院にない産婦人科とリハビリセンターもあるからです。                             |        |
|    | ④   | もし、市民総合病院がなくなると、地元の人にはほかの地域の病院に行かなくてもいけなくなります。                                |        |
|    | ⑤   | しかし、最寄りの総合病院でも、車で1時間以上かかるところにあるため、通院の患者の大半を占めるお年寄りや妊婦さんや体の不自由な方には大変不便だと思われます。 | 実証     |
|    | ⑥   | ぜひ「ほどがや通信」を通して、市民総合病院の存続を市や区の関係者に訴えたいと思います。                                   | 意見(主張) |

表6 CNとJPによる論理展開のパターン

| 流れ             | CN (%)    | JP (%)    |
|----------------|-----------|-----------|
| 1問題提起→意見→実証→意見 | 15 (50.0) | 6 (20.0)  |
| 2問題提起→意見       | 6 (20.0)  | 4 (13.3)  |
| 3問題提起→実証→意見    | 5 (16.7)  | 11 (36.8) |
| 4問題提起→意見→実証    | 3 (10.0)  | 1 (3.3)   |
| 5意見→実証→意見      | 1 (3.3)   | 4 (13.3)  |
| 6その他           |           | 4 (13.3)  |
| 合計             | 30        | 30        |

両者の違いはCNが「実証」に入る前に、先に「意見」を述べる点があるという点である。表7と表8はCNとJPの作文例である。CNはまず投書の目的を述べた後に、病院閉鎖についての意見「病院がなくなったら住民に影響を与える」が来ている。その理由は後文で示す「お年寄りの利用者が多く、また妊婦も多い」ことである。一方、JPは「病院が閉鎖されたら、どうなるか」という問題提起をした後、「閉鎖に関わることを論じる」実証に入り、最後に「存続を求める」

表7 問題提起—意見—実証—意見【CN】

| 段落 | 文NO | 学習者C025   | 要素   |
|----|-----|---|------|
| 1  | ①   | 市民総合病院は経営不況ので、今年年末は閉院することが聞いています。                 | 問題提起 |
|    | ②   | 私はこの病院が <u>続けたほうが良い</u> と思います。                    | 意見   |
| 2  | ③   | この市民病院の婦人科と康復中心はこの付近の病院にありませんでした。                 |      |
|    | ④   | もしこの病院が閉まるなら、ここに住んでいる居民にとっては本当に不便でした。             |      |
| 3  | ⑤   | この辺りは老人と婦人が多いので皆なこの病院が保存してほしいと言って、ほかの病院は遠くて不便でした。 | 実証   |
|    | ⑥   | 病院はそんな簡単に閉めることはできないだろう。                           | 意見   |
|    | ⑦   | 経営不況になっても、政府が居民に考えて、 <u>支援してほしい</u> と思います。        |      |
| 4  | ⑧   | 私達はマスコミの力を信じて、政府によく考えて、 <u>この病院を保存したい</u> と思います。  |      |
|    | ⑨   | よろしくお願いします。                                       |      |

表8 問題提起—実証—意見【JP】

| 段落 | 文NO | 母語話者J003   | 要素   |
|----|-----|--|------|
| 1  | ①   | 今、経営難のために、市民総合病院の閉鎖が検討されています。                              | 問題提起 |
|    | ②   | はたして、私たちの町は、この病院が閉鎖されたら、どうになってしまうのでしょうか。                   |      |
| 2  | ③   | 確かに、経営難で、病院の閉鎖は仕方のないことなのかもしれません。                           | 実証   |
|    | ④   | お金が無ければ、やってはいけませんから。                                       |      |
| 3  | ⑤   | しかし、この市民総合病院は、私たち住民にとっては、なくてはならないものだと思います。                 |      |
|    | ⑥   | この病院には、産婦人科やリハビリテーション科といったものがあり、これらは、近隣の町には、ありません。         |      |
|    | ⑦   | では、もし、この病院が閉鎖されたら、どこで子どもを産めばいいのでしょうか、どこで、リハビリをすればいいのでしょうか。 |      |
|    | ⑧   | また新たに、産婦人科の病院やリハビリテーション科の病院を作るには、多くのお金がかかります。              |      |
| 4  | ⑨   | 私の意見として、この市民総合病院は、閉鎖せず、現行の診療体制での <u>存続を求めます</u> 。          | 意見   |
|    | ⑩   | 病院が閉鎖したあとの、この町のこと、住民のことを考えて、 <u>結果を出してほしい</u> です。          |      |

次に主張の文が文章の出現した位置により文章構造の型を分析する。主張文の位置は伊集院・高橋（2012）に従い、形式段落が3つ以上の場合、「はじめ」は第1段落、「おわり」は最終段落とし、それ以外は「なか」に入れた。また、形式段落が2以下の場合、意味段落の認定を筆者の判断で行った。

例えば、前掲の表5は1段落の構成で書かれた文例である。「①問題提起」の部分「はじめ」に、「⑥意見（主張）」の部分「おわり」に、それ以外の部分を「なか」に考えることができる。主張の文が「おわり」にきているので、「尾型」に属すると考えられる。このように、調査資料60編を分析した結果は表9のようになる。

表9 CNとJPによる作文の文章構造の型

| 型    | CN (%)    | JP (%)    |
|------|-----------|-----------|
| 頭型   | 0 (0.0)   | 0 (0.0)   |
| 中型   | 3 (10.0)  | 1 (3.3)   |
| 尾型   | 16 (53.3) | 14 (46.7) |
| 頭尾型  | 2 (6.7)   | 10 (33.3) |
| 頭中型  | 0 (0.0)   | 0 (0.0)   |
| 中尾型  | 6 (20.0)  | 4 (13.4)  |
| 分散型  | 0 (0.0)   | 0 (0.0)   |
| 非明示型 | 3 (10.0)  | 1 (3.3)   |
| 合計   | 30 (100)  | 30 (100)  |

網掛けは主張の文の出現位置を示す。

表9よりCNとJPの文章構造において最も多かったのは「尾型」であることが分かる。CNは「尾型」が最も多く、他の型を大きく引き離している。JPは「尾型」が最も多かったが、次いで「頭尾型」も33.3%に達している。文章の「おわり」に主張の文を置く他のタイプ（頭尾型、中尾型、分散型）を入れて考えると、CNは80%、JPは93.4%となる。つまり、CNとJPの両者とも主張の文が最後に来るといふ書き方が多かったと言える。

続いて、「尾型」と「非尾型」の数について、CNとJPの間に差があるかどうかを見るために、カイ2乗検定を行った結果、有意な差が見られなかった（ $\chi^2(1) = .267$ ,  $p = .606$ , ns.）。しかし、「頭尾型」と「非頭尾型」の項目では有意な差が見られた（ $\chi^2(1) = 6.667$ ,  $p < .01$ ）。つまり、JPはCNよりも「頭尾型」を多く用いて作文していると言える。

以上から、今回のタスクではCNとJPは共に「尾型」の文章構造を用いて作文する機会が多いことが分かった。また、「頭尾型」の文章構造はJPの特徴であると思われる。

## 6. 考察

課題1は「日本語学習者と母語話者は段落数の使用に違いがあるか」であった。意見文、論説文のような論理的な文章の場合、「序論－本論－結論」または「序論－総論－各論－結論」に分けるのが通常である（市川 1978; 木下 1981）。今回の作文でCNは3, 4段落で、JPは1, 2段落で作成した者が多かった。意見文の構造からみれば3, 4段落が適切であるので、JPよりもCNのほうが段落への意識が強いと考えられる。しかし、CNの段落意識、すなわち1, 2段落による文章構成で作成した人の割合は李（2011）の結果に近い。また、段落分けのない作文、5段落以上の作文はどちらも多いことから、二通（2001）と李（2011）の指摘の通り、CNもJPも文章を作成するとき、段落を意識して書く必要があることと改めて裏付けられたことになる。

続いて、課題2は「日本語学習者と母語話者は展開パターンに違いがあるか」であった。今回の作文でCNは「問題提起－意見－実証－意見」のパターンが半数を占めているが、JPは「問題提起－実証－意見」のパターンが3割強である。いずれも二通（2001）の結果と異なっている。これについては課題の出し方によって起因していると考えられる。すなわち、明確にAとBのどちらかの立場を求める指示文がある場合、主張の文が文章の頭に来やすいと予想できるからである。

また、段落と展開パターンを合わせて考えると、CNは4段落構成に「問題提起－意見－実証－意見」の流れで作成した人が多かった（5名）。次に多かったのは同じ流れで3段落構成であった（4名）。一方、JPは3段落構成に「問題提起－実証－意見」の流れで作成した人が多かった（4名）。次に多かったのは1段落構成に「問題提起－意見」、1段落構成に「意見－実証－意見」、2段落構成に「問題提起－実証－意見」の流れが多かった（各3名）。JPとCNのこの

ような差異から、次のような可能性が考えられる。すなわち、意見文を書くときに、主張が最後に来るという流れを書き手がある程度把握できていたとしても、段落の意識が薄いために、文章構造のバランスが崩れる恐れがある。また、文章に適切な改行が施されなければ、文章を最後まで読まなければ全体の意味の把握が困難であるため、読み手に負担を与えてしまう文章になっている可能性がある。これについて二通(2001)にも同様の指摘がある。

加えて、段落の字数の使用は展開パターンと関連があるかを調べた。ここでは3, 4段落による論理的な文章の構成を分析した。JPは200字未満の項目のみに使用があったが、CNは201から400字の使用があった。それら9名の文章を見ていくと、意見と実証が1つの段落に入っていたために、字数が多くなったということが観察された<sup>8)</sup>。しかし、今回は形式の改行と内容の改行が一致しているかについては分析を行っていないので、稿を改めて論じたい。

課題3は「学習者と母語話者は文章構造の型に違いがあるか」であった。今回の作文でCNとJPはいずれも尾型が多かったという結果が得られた。本稿ではメイナード(2014)で述べられた記述と同じような結果が得られた。メイナード(2014)は日本語の意見文で書き手の意見が「特に尾括型として談話の末尾に出ることが多い」と述べている。しかし、これはLee(2006)および伊集院・高橋(2012)の結果と異なっている。Lee(2006)では学習者も母語話者も双括型が多く、伊集院・高橋(2012)では母語話者に頭尾型が多かったが、学習者にはパターンが見られなかったことが報告されている。この結果が課題の出し方、母語による作成経験、論理的な文章を書くトレーニングの有無によるものなのか、更に調査する必要があると思われる。

続いて、段落と文章構造の型に関連があるかを分析した。CNは「1段落構成+尾型」(7名)が多かったが、JPに多かったのは「1段落構成+頭尾型」と「2段落構成+尾型」(各5名)であった。論理的な文章の構成は「序論、本論、結論」の3段法を採ることが一般的であるため、今回の作文でいずれも3段法の形式を逸脱している人が多かったと言える<sup>9)</sup>。それにも

かわらず、今回の作文では結論を最後に置く点はどちらにおいても観察された。これは、尾型の展開パターンが、投書の目的に対する課題の達成のための方法として、読み手の共感を呼ぶために、用いられるからであろう<sup>10)</sup>。

さらに、展開パターンと文章構造の型との関係について調べた。CNは「問題提起—意見—実証—意見+尾型」(7名)が多かったが、JPは「問題提起—実証—意見+尾型」(10名)が多かった。この結果を表6の数値と比べると、尾型を用いているCNには「問題提起—意見—実証—意見」以外の流れで作成していた人が多く、JPでは依然として「問題提起—実証—意見」の流れで作成していた(CN:15名→7名, JP:11名→10名)。このように、CNは意見文を作成しているときに、JPより頭の中で論理展開が行きつ戻りつ文章を推敲し、結論にたどり着くまでに多様な思考過程を経ており、JPと異なる展開パターンを見せることが推測できるが、JPにはそういった特徴が見られなかった。その原因はライティングの認知モデル(Flower & Hayes 1981)に関わっていると考えられる。つまり、CNが文章を生み出すまでに様々な要素に配慮しなければならず、そのため、要素の一方に注意が行き過ぎてしまうと、流れが変わってくるのではないかと考えられる。これについて、CNの母語で書かれた同じテーマの意見文を比較して分析する必要がある。

## 7. おわりに

本稿では日本語学習者と母語話者による投書の意見文における段落分けおよび文章構造について分析を行った。結果は以下の通りである。

① 段落分けについては、CNはJPよりも論理的な文章の構成「序論・本論・結論(3段法)」を意識して作成した者が多かったが、いずれも文章を作成する際に段落指導への工夫が必要である。

② 論理展開パターンについては、CNは「問題提起—意見—実証—意見」のパターンが半数を占めているのに対して、JPは「問題提起—実証—意見」のパターンが4割に満たなかった。段落と合わせて分析すると、いずれも適切な構成で作成した者が少ないことが明ら



かになった。

③ 文章構造については、CNとJPはいずれも尾型が多かったという結果が得られた。特にJPは頭尾型の使用が顕著である。段落と文章構造を合わせて分析すると、段落への意識が薄いにもかかわらず、主張の文が文章の最後に来ている点で投書の意見文の課題達成を満たしていると言えることができる。展開パターンと文章構造を合わせて分析すると、CNは結論にたどり着くまで多様な思考過程を経ており、異なる展開パターンを見せているが、JPはそういった特徴が見られなかった。

以上の結果より、意見文における段落意識の喚起や論理展開に関する指導法が必要ではないかと考えられる。今回の考察では、改行の適切さや母語による作成経験といった要因を分析することはできなかった。今後の課題である。

## 注

- 1) 市川 (1978) は改行による形式段落は恣意性があると述べ、文章の内部の文集合が内容上のまとまりとして、相対的に他と区別される部分に「文段」という概念を立てたが、佐久間 (2003) は「文段・話段」の総称としての「段」を文章談話の直接的な成分として考え、書き言葉では「文段」、話し言葉では「話段」と区別している。
- 2) 統括は「文章の内容を支配し、または、文章の内容に関与することによって、文章全体をくくりまとめる機能をいう」ということである (市川 1978: 157)。本稿では主張の文が統括の文と言えるかは議論する余地があるので、佐久間の用語を用いないことにした。
- 3) 資料は原稿を忠実に反映させる電子化データと、検索するのに便利な補正データがある。本稿では後者を用いた。
- 4) 日本語能力試験 (JLPT) を指す。
- 5) SPOTは筑波大学留学生センターが開発した日本語テストである。満点は65点である。SPOTの詳細は <http://ttbj.jp/p2.html> を参照されたい。
- 6) 全体の一致性に関して、CNの部は完全一致36.7%、部分的に一致46.7%、不一致16.6%であるが、JPの部は完全一致26.7%、部分的に一致70%、不一致3.3%である。

- 7) ことばの研究は研究目的によって望ましいものが異なる。よって、単語をどこに切るかが課題となっている。これについては柏野ほか (2000) を参照されたい。
- 8) 実証と意見の部分段落に分けて作成したCNは9名のうち、1名のみであった。
- 9) 「3段落+尾型」にはCNが4名、JPが4名いた。
- 10) 今回のタスクでは明示的に主張を示さないCNは3名、JPは1名いた。(例えば、JP: 市民は今こそ声をあげる必要があるだろう。CN: 私達のために、貴社が社会にこの事実を知らせて、助けていただけませんか。)

## 参考文献

- 浅井美恵子. 2002. “日本語作文における文の構造の分析－日本語母語話者と中国語母語話者の上級日本語学習者の作文比較－”. 日本語教育. 115号, 51-60.
- Flower, S. & Hayes, R. 1981. “A Cognitive Process Theory of Writing”. *College Composition and Communication*. 32 (4), 365-387.
- Grabe, W. and Kaplan, R.B. 1996. *Theory and Practice of Writing: An Applied Linguistic Perspective*. Longman. New York.
- 長谷川哲子・堤良一. 2008. “アカデミックライティングにおける『分かりにくさ』の要因は何か?－意見文の分析を通じた一考察－”. 大阪産業大学論集 人文・社会科学編. 11, 21-34.
- 伊集院郁子・高橋圭子. 2012. “日本・韓国・台湾の大学生による日本語意見文の構造的特徴－『主張』に着目して－”. 日本語・日本語学研究. 第2号, 1-16.
- 市川孝. 1978. 国語教育のための文章論概説. 教育出版.
- 石黒圭編. 2014. 日本語教師のための実践・作文指導. くろしお出版.
- 金澤裕之編. 2014. 日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス. ひつじ書房.
- 国語学会編. 1980. 国語学大辞典. 東京堂出版.
- 柏野和佳子・小椋秀樹・田中牧朗・加藤安彦. 2000. “話し言葉コーパスにおける単位切りと品詞付与の方法”. 言語処理学会第6回年次大会発表論文集, 99-102.
- 木下是雄. 1981. 理科系の作文技術. 中公新書.



- Lee 風子. 2006. “留学生の書く日本語意見文の分析－日本人学生との比較において－”. 立命館法学別冊 ことばとそのひろがり. 4, 399-412. <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/law/lex/kotoba05/LEE.pdf>, (2017-6-30).
- 李宗禾. 2011. “中上級日本語学習者の意見文に見られる段落意識”. 明海日本語. 第16号, 23-35.
- メイナード・K・泉子. 2014. 談話言語学－日本語のディスコースを創造する構成・レトリック・ストラテジーの研究－. くろしお出版.
- 森岡健二. 1995. 新版 文章構成法. 東海大学出版会.
- 長尾高明. 1992. “文章と段落”. 日本語学. 11 (4), 26-32. 明治書院.
- 二通信子. 2001. “アカデミック・ライティング教育の課題－日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析から－”. 北海学園大学学園論集. 110, 61-77.
- 日本語教育学会編. 2005. 新版日本語教育事典. 大修館書店.
- 佐久間まゆみ. 1990. “ケース8 文章の構造類型”. 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編. ケーススタディ 日本語の文章・談話. おうふう, 94-105.
- 佐久間まゆみ. 1999. “現代日本語の文章構造類型”. 日本女子大学紀要文学部. 第48号, 1-28.
- 佐久間まゆみ. 2003. “文章・談話における「段」の統括機能”. 北原保雄監修. 朝倉日本語講座7 文章・談話. 朝倉書店. 90-119.
- 梶本聡子. 1997. “意見文の構造－中・上級学習者の作文における問題点”. 多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集. 創刊号, 79-92.
- 田代ひとみ. 2007. “中級日本語学習者の意見文における論理的表現”. 横浜国立大学留学生センター教育研究論集. 14, 131-144.
- 田中真理・阿部新. 2014. Good Writingへのパスポート－読み手と構成を意識した日本語ライティング. くろしお出版.

